れ国府周辺の東部、田中荘、信太庄、南野牧と広大なる地域の分配権を握った。知家から二代知重、三代泰知、四代時和、五代宗知、六代貞宗を経て七代治久のとき、この城に北畠親房を迎えた。延元三年十月から興国二年十一月迄四年間親房この城にあって関東の宮方の勢力の中心となって足利尊氏にとって一大敵国を形成した。大宝城の下妻政泰関城の関宗祐、真壁城の真壁幹重を初めとして親房に協力するものが多かった。そこで尊氏高師冬を遣はし攻撃するに及び治久漸く動揺し遂に師冬の軍を城内に入れたので親房城を脱出関城に走り小田城の攻防戦は終った。この四年間の在城中親房は名高い神皇正伝記は南朝の正統なる所以をといて新帝後村上天皇に献上しようとしたものであり、職原抄も同じように年若い新帝に朝廷の官職の由来などについて説明したもので戦乱の間にしかもわずかな参考書しかなかったであろう条件のもとでこのような著書を残した親房の博識には全く驚くの外はない。

その後小田氏は八代孝朝、九代治朝、十代持家、十一代朝久、十二代成治、十三代治孝、十四代政治を経て、十五代氏治（天奄）のとき佐竹義重のため城を奪われ、十五代四百年に及ぶ小田氏の支配は終り義重は客将梶原政景をおきつづいて小場義宗之に代り慶長七年佐竹義宣秋田移封まで在城、その後城は破却された。

方五町、四重の校郭と堅濠をめぐらす本丸の一隅涼台と称するところ大樗あり往時を偲ばせるものがある。ちょうど関東鉄道筑波線が城内を横断している。小田駅は城内の獄屋あたりであろうか。　以下次号

渋柿は馬鹿の薬

柳生四郎

土浦市の観光課で出した「つちうら」というパンフレットがある。これだけ見たら何という美しい街だろうと誰しも思うにちがいない。しかし一歩街を歩いて見たらその虚像と実体とのちがいのひどさに驚きと失望を感ずるにちがいない。

本になった写真集は、あばたやできものをかくした、こしらえものの見合写真のようなものだ。客を迎えるために掃き清めて、水を打った玄関先のようなものだ。裏にごたごたとおっつけたごみや雑物には、ちゃんと蓋をして表に出さない。それが観光の写真集である。それがまたこの街の気性を現わしているようで寒々しいものを感ずる。